

9 下痢による衰弱及び発育不良を呈した肉用幼雛の病性鑑定事例

オカダ レナ
○岡田玲奈・小川恵実香（愛知県東部家畜保健衛生所）

【はじめに】

今回、我々は、管内の肉用養鶏場において衰弱及び発育不良を呈した幼雛に対して病性鑑定を実施したので、その概要を報告する。

【発生状況】

発生農家は3農場で約13万羽の肉用鶏を飼養しており、雛は全て管内の孵化場より導入している。

このうちの1農場で、2015年4月7日餌付けの名古屋種（ロット羽数4,300羽、以下A群）において4日齢から歩様異常及び発育不良を呈し死亡する雛が確認された。A群における発生は15日齢以降沈静化した。隣接鶏舎の4月17日餌付けの名古屋種（ロット羽数4,000羽、以下B群）でも同様な症状が確認されたことから、4月28日に管理獣医師から病性鑑定依頼があった。なお、両鶏群ともに発生はオス群で顕著であり、Aオス群では沈静化までに2,150羽中64羽が、Bオス群では3日齢から11日齢までに2,000羽中91羽が死亡または淘汰された。また、8月に実施した聞き取り調査から、両鶏群の入雛後に気温の低下があったことと、4月から新しい担当者が両鶏舎を管理していたことも分かった。

【材料及び方法】

Bオス群の生存雛（11日齢）5羽を病性鑑定材料とした。細菌学的検査は、腸内容プール及び肝臓をDHL培地で37℃、24時間好気培養した。病理組織学的検査は、主要臓器のヘマトキシリン・エオジン染色（HE染色）と空腸から結腸のグラム染色を実施した。

また、気象庁のホームページで、入雛後の農場所在市の最低気温と風向きを確認した。

【結果及び考察】

剖検時に雛は衰弱、発育不良を呈していたほか、稟告にはなかった下痢が認められた。肉眼的に主要臓器に著変はなかったが、空回腸に水様性内容物の貯留が確認された。細菌学的検査では、有意菌は分離されなかったが、病理組織学的検査では4羽の空腸から結腸の粘膜上皮細胞にグラム陰性桿菌が付着し、粘膜上皮細胞の軽度の変性や剥離が確認された。一方、気象データについては、A群の入雛翌日の最低気温は前日に比べて約2℃低下し、B群では約4℃低下していた。また、1日の平均的な風向きのデータからは、導入から数日間、両オス群の飼養鶏舎に直接風が当たっていたことが分かった。

一般的に今回のような幼雛の下痢は、感染症の他に環境要因の影響も大きいと考えられる。本事例でも、新しい担当者が、気温や風の影響を考慮した適切な温度管理ができなかったことが原因の1つと思われた。寒冷ストレスを受けた雛は免疫力が低下し、さらに細菌の増加などが重なったことで衰弱、発育不良に至ったと推察された。今後、寒冷ストレスが起きないように管理法を検討し、指導したいと考えている。